哲學研究　第三百八十七號　第三十三卷第六冊

アリストテレス存在論の基礎構造について（承前）

岡野留次郎

一〇

この問題の根本的な解決を試みるに先つて、我々は、先づ、アリストテレスに於ける形相と質料との聯關を、今一應顧みて置く必要があると思ふ。

アリストテレスは、普通一般に、彼に先行した多くの思想家の擧揚した種々の原理を、彼の所謂四原因の說に統一したと考へられて居るのであるが、之は勿論正しい。彼以前の先哲の思想內容は、彼の綜合的な體系の中に集大成されたのは事實である。しかし、かやうな綜合的集大成は、單に種々の思想の雜然たる集成と云ふ形で行はれたのでなく、一つの中心的な思想によつて、統一的に整理されたのである。其際、彼の鋭い論理的分析的思惟が、先哲の思想內容を論理的に檢討し、その歸結を嚴密に追求して行つたことも事實であるが、他方、彼が彼自身の直接の體驗に深く入り込み、解決の鍵をそこに見出さうとしたことも忘れられてはならない。形相・質料の二原理の如き、固より彼以前の思想家の既に擧揚した原理であるに相違はないが、又同時にこの兩原理を、具體的個物に關する彼自身の存在體驗に基かしめ、これによつて彼獨自の解決の方途を見出したと解することも、決して不當な見解ではないであらう。

卽ち無限定的な質料の概念、事物の本質的形相の概念は、既に何等かの形に於て、彼以前に見出される思想ではあるが、これを具體的個別的實有の構成原理として取上げ、兩者の存在論的意義並に聯關を明にしやうとしたところに我々は彼の獨自の立場とその解決を見出さなければならぬ。

かやうな立場から考察すれば、アリストテレスの形相は、それ自體は勿論一般的な普遍的本質を備へたものであるが、決して具體的には個物的存在を離れて實存するものでなく、只抽象的・論理的にのみ個物を離れて思考し得るに過ぎないのである。一般的概念を對象として持つ認識と云つても、よしそれが主觀的な側から見ればエネルゲイアであつても、尙可能的な知識と呼ばれ、その概念的內容が、個物に於て現實的に實存し居るものに關係する場合に、これを現實的な知識と呼ばれるのである。[1] 卽ち、普遍と云つても、アリストテレスに於ては、只、個物の本質的限定性として本源的に存在論的意味を有するのであつて、一般的種的限定性は、只具體的な個別性の中に於てのみ實在性を持つのである。同時に、質料も亦、それ自體の本質に於ては無限定的な基體であるが、具體的には、常に個別的實有の構成原理として、常にその中に止住するものとして實存する。[2] かやうに考へて來るならば、一方に無限定的な質料原理、他方に超越的な形相原理が、個物を離れて先づ想定せられ、後此兩原理の綜合統一によつて個物が成立すると考へらるべきではなく、我々の具體的存在體驗に與へられる個物的實有の存在論的分析の結果、その構成原理として兩原理が見出され確立されたと見做すべきであり、從つて個物的實有を個體たらしめる原理は、單純に形相の側に認めることも、又單純に質料の側に認めることも、共に充分妥當性を持つと考へることは出來ない。然らばブリンガーの云ふやうに、兩者共に個體性の原理であると云ふべきであらうか。此見解は確かに一面に於て正しいであらう。しかし、兩者共に個體性の原理であると云ふことは、結局、兩者共、それぞれ獨立な原理としては、個體を確立し得ないと云ふことを意味するのであり、その事は反面に於て、此兩原理が、個體を個體として確立するには、或一定の仕方に於て、個體の中に綜合統一せられ、兩者が個體の構造契機となつて相互に聯關して居ると云ふ事態がなければなら

ない。かやうな事態を明にするには、單に抽象的に形相や質料を考察するのでなく、具體的な個物を、體驗の世界に於て、存在論的に分析考究することが必要である。

扨てしかし乍ら　アリストテレスが、右のやうな見地から、明な自覚を以て、かやうな存在論的分析を行つたと云ふならば、それは勿論云ひ過ぎであらう。只我々が深く彼の思索の思惟動機に立入つて考察する場合、質料の形相的限定が行はれるに當つて、それの行はれる「場所」及び「時間」が、個體原理の有力な根源として出場し來るのを拒むことが出來ない。しかしてかやうな考方に手引を與へるものは、自然學に於ける場所並に時間についてのアリストテレスの所論であると思ふが故に、我々は次に、此の問題の解明に突き進まう。[3]

註(1) Vgl. Bulinger, op. cit. S. 46; De an. B. 5. 417a 29; ibid. I, 7. 431b 14 15; ibid., 8. 431b 21 26.

(2) Phys. A, 9. 192a 31-32.

(3) 之は附隨的なことに過ぎないのであるが、τόδε なる言葉の意味並に使用法も、此問題の解決に斜光を投げるやうでもある。即ち、τόδε なる言葉は云ふ迄もなく、ὅδε の中性詞であるが、ὅδε は οὗτος より遙かに具體的現實的の意味が强く、屢々「此處」或は「今」を示すために用ゐられることは ὁ ἐνθάδε ἐγώ（此處に在る私自身）や、ἐκεῖνο τοῦδε（今から）μέχρι τοῦδε τοῦ χρόνου（今迄）、τόδε（現在の狀態）、ἐπὶ τόδε（今日迄）等の語法によつて察し得るのであつて、τόδε τι が或一定の時間・空間に於て限定された具體的個物を意味することは明である。τόδε τι をして τόδε τι たらしめるものは、單に質料でも又形相でもなく、さりとて單純に兩者と云ふのでもなく、實に兩原理が、更に本源的な時間及び空間の兩原理によつて媒介されることによつて、個體をして個體たらしめると見るべきである。

一一

既にプラトンが質料と空間の密接な聯關を認めたこと、否質料は一種の空間（τόπος τῆς γενέσεως）に外ならないこ

とを主張したことは、[1] 余りにも周知のことであるが、アリストテレスは、空間（χώρα）については多くを語らず、自然學に於て主として場所（τόπος）について論じて居ることは、これ又周知のことに屬するが、此場合アリストテレスは、何故一般に空間について語らず、主として場所について語つたのであるかゞ我々に取つて興味ある問題である。

このことは云ふ迄もなく、アリストテレスに於ては、空間は常に運動體との聯關に於て把握されてゐたことを示すものであり、存在はすべて、何等かの場所に於てあり（εἶναι τοῦ）、勝義に於ける運動は、場所の轉換による運動と考へられたことと密接に聯關する。即ち、アリストテレスに取つては、凡そ運動體を缺く單なる空虛としての空間は、その存在を認めず、現實の空間としては、常に運動體の占める場所として、そして運動は、かやうな場所の轉換として、現實的な意義を持つと考へられたのである。このことは、我々の問題の解決に重要な意義を持つのであるが、その詳細は後に述べることとして、差當り、場所に關するアリストテレスの特異な考察から論歩を進めて行かう。

運動が場所の轉換であり、凡べての存在は、何處かに在ると云ふことから考へて、場所の存在することに就いては疑を容れないのであるが、問題は、その本質である。これについては先づ形相及び質料と場所との關係が注目せられる。既にプラトンは質料を空間と同一視して居ることは先に述べた通りである。場所は先づそれぞれの物體を直接包圍するもの（τὸ διάστημα τοῦ μεγέθους）と云ふ觀點に立てば、物體の形相（εἶδος）と一致する譯であるが、大さの間隔（τὸ πρῶτον περιέχον）と云ふ點から見れば、質料とも考へられるからである。所が、場所はこれ等何れとも同一でないことは直に明瞭である。何故なら、物體は運動し、運動することによつて、場所を相互に轉換するからである。場所が物體から引離され得ないものとすれば、このことは明に不可能であらう。從つて、場所は、形相及質料と相似たものであり、密接な關係をこれ等と持つことは明瞭ではあるが、しかもこれ等と同一ではなく、飽く迄區別せられなければならない。然らば、場所は、物體の自由に占め得る場所として、それ自體は空虛なる延長であるか。

アリストテレスによれば、場所は物體と異り、これから引離され得るものではあるが、さりとて運動體を離れて單獨に存在する何等かの空虛なる空間と云ふが如きものではない。かやうなものは一般に自然の世界には許され得ない。そこで場所とは「包むものの第一の不動の限界（τὸ τοῦ περιέχοντος πέρας ἀκίνητον πρῶτον）」と云ふ、かの周知の定義が下される譯であるが、この定義は如何に解釋すべきものであるかゞ問題である。

この場所の定義並にこれに附隨した種々のアポリアについては、古くベルグソンが詳細な研究を試みて居り、多くの示唆と暗示を與へるものであるが、そのアポリアの解決の結果に對しては、尙多少の疑義を持つことが出來る。我々は、別の立場から、この定義に含まれて居るアポリアの解決に努力して見やう。

この定義の中には、ベルグソンが指摘するやうに、確かに理解に困難なアポリアが含まれて居る。何故なら、物體が場所を持つと云つても、場所が全く物體と一致して居る限りに於ては、そのことは決して現實的に顯はた譯ではなく、物體が運動し、場所が物體から引離される時に、却つて最もよく物體が場所を持つといはねばならないからである。卽ち、「包まれたものに對し「それに觸れ、それを包む表面が、場所の役割を最もよく果すのは、包まれたものが、自ら遠ざかり、それの伴侶から離れる時である。しかも、その時は、最早や、そのものは、同じ表面に觸れられも包まれもしないであらう。從つて、物體は、それの場所から遠ざかつた時それの場所を持つ、と云はねばならない——これは全く理に反すると思はれる」とベルグソンは述べてゐる。[2] 併し、更に離つて考へれば、このアポリアこそ、場所の存在論的本質を最も端的に表現したものではないか。何故ならば、場所は、それ自體に於ては不動と考へられるのであるが、しかも常に運動との密接た聯關に於てのみ考へ得ることを、このアポリアは端的に示して居るからである。事實アリストテレスに於て、場所に關する運動、卽ち、所謂位置運動（φορά）、增大及び縮少（αὔξησις καὶ φθίσις）が存在しないならば、場所は探求されたかつたであらう。天體が、それを包む物體がたいに拘らず、特に場所に於て在ると云はれるのも、それが常に運動に於て在るが故である。[3] 尤も物體が運動せず靜止して居る場合でも、

場所を持たぬと云ふ譯ではない。同質的な連續的な物質の各部分でも、可能的には場所を持つ、場所に於て在ると云ひ得る。只それが分離され、或は堆積され、或は接觸せられる時、それは既に現實的に場所を持つと云ひ得る。[1] して見れば、況んや、一つの物體が靜止して居る場合でも、これを包括する物體と分離し、接觸關係にあれば、現實的に場所を持つこと勿論である。所で、ベルグソンも示唆するやうに、[2] 包まれたものが常に不動に止まつてゐる限り、接觸と連續とを區別する充分な理由を見出すことは困難で、包まれた物體が包むものから離れ、それから遠ざかる可能性があることによつて、場所は、現實的に場所の本質を發揮すると云はなければならないであらう。

以上のことからして、我々の理解し得ることは、場所は云はゞ一種の容器（ἀγγεῖον）の如く考へられるのであるが、容器が、云はゞ、運ばれ得る場所（τόπος περιφορικός）と云ひ得るとすれば、場所は不動の容器（ἀγγεῖον ἀμετακίνητον）[3] とも云はれ得ると云ふことである。だが、之は勿論、一つの比喩的な表現に過ぎないのであつて、容器は、必ずしもこれを滿す物質を必要としないが、場所は、運動體から離れては意義を持たない。單なる空虛なる場所は、既に述べた如く、アリストテレスでは許され得ない概念である。して見れば、場所は、不動である限り、運動するもの、包まれたものには屬しない。しかし、又包むものが運動すると考へられる限り、このものにも屬し得ない。即ち、包むものが不動と考へられる限り、そのものの包まれたものとの接觸面をなす限界（τὸ πέρας τοῦ περιέχοντος σώματος）[4] そのものと云はなければならぬ。云はゞ、一種の表面（ἐπιπέδον τι）とも云ふべく、容器の如く包むところのものであり、場所は包まれたものと一致する。[5] 所で、かやうな不動の限界としての場所は、物體が靜止して居る限り、不變不動であるが、それが運動する限り、限界は移動する。しかし限界が移動すると云ふことは、同一の限界或は場所そのものが移動することでなくて、それが轉換されることを意味する。運動とは場所の轉換なのである。場所は、物體を包む表面であり、物體と一致するものであるに拘らず、物體の形相と異り、物體から引離され得、又かく引き離され得ることによつて、場所が現實的に場所たる役割を果すのである。此事は如何に解釋すべきであらう

か。

此事は、場所そのものは不動であるに拘らず、却つてこのことによつて、物體の運動を可能ならしめる原理と考へることによつて、このアポリアを解決し得るのではないか。卽ちアリストテレスの自然學に於て、世界は一つの全體をなし、有ゆる物體は、此世界内に於て、運動する主體として、獨立な存在を保つ。所で、一つの運動體をかやうな獨立の存在として確立するには、此物體を他のそれから區別すると共に、それが世界環境内に於て、如何なる位置を占め、場所を持つかを確立することによつて可能である。そして場所は、或運動體を一つの獨立的存在として、これを世界環境から區別し、個物を個物として限界づける原理に外ならない。物體は存在する爲に、又運動するために場所を必要とする。しかし、場所は、存在するために更に場所を必要としない——もしそうでないなら、その第二の場所は更に第三の場所を必要とし、かくして無限に進むであらう——場所は、只限界づけられたものに於ける限界(τὸ πέρας τοῦ περιέχοντος)[9]の意味に於て存在する。この事は卽ち、場所が、かやうな運動體を、自然的世界に於て、そのやうなものとして存在せしめる自然存在論的原理に外ならぬことを示すものである。場所が、先づ第一に、個物を個物として限定する第一の、そしてその個物に固有な場所(ὁ πρῶτος τόπος)として現はれる理由が首肯出來る。所で或る運動體を包むところのものが、更に他のものによつて包まれて居ることが可能であり、かくして、有ゆる物體を包むところの全宇宙(οὐρανός)が、完全な共通の場所(τόπος κοινός)でなければならぬ。[10] 第一のそして固有な場所とは、例へば、汝以外の何ものをも包まないところの此の場所である。ところで、汝は此の場所に在ることによつて、地上に在り、地上に在ることによつて、大氣中に在り、大氣は宇宙内に在ることによつて、汝は最後に宇宙内に存在するのである。[11] 全宇宙世界は、更にそれを包むものがなく、却つて凡てを包むものであるから、場所を持ち、或は場所に於て在るとは云ひ得ない。[12] しかし、全宇宙は、不斷に回轉運動をなし、部分は他の部分を包む關係に於て在り、部分はすべて場所を持つと云ひ得るからして、或意味では、全體も亦場所に在る——否寧ろ凡ての物體

が、そこに於て運動するかの共通の場所そのものと一致すると云ひ得るであらう。何故なら、全體としての自然世界は、部分的には場所の轉換をなし、從つて不斷の運動に於て在るけれども、全體としては、場所轉換としての運動は不可能であり、從つて不動のものと考へ得られ　そこに於ては、凡べての他の物體は、場所を轉換することによつて運動を可能にせられるからである。

我々は、最初に、アリストテレスが、何故に、自然學に於て空間について語らず、主として場所について語つたのであるかと云ふ疑問を提出することから出發した。そして、我々は今、場所は決して空虛な延長的空間と云ふ如きを意味するのでなく、自然に於ける運動體と密接な聯關をもつ概念であり、それが先づ固有な場所としては、運動する個體をそのやうなものとして、自然世界内に於て限定する自然存在論的原理として把握することによつて、以上の疑問に答へ得る端緒を得たと信ずる。何故なら、アリストテレスに於ては、場所は、時間や無限と共に、運動する自然存在を、かやうなものとして可能たらしめる自然存在論的原理を意味したのであつて、運動する物質原子から引離され得る、單に空虛なる空間（デモクリトス）でもなければ、プラトンが、かのチマイオスに於て論じたやうな、質料的原理を意味する空間でもなく、實に世界環境としての自然に於て、現實的に運動する個物が、一定の場所を占めることによつて、自己の獨立的個別存在を確立し、他の物體と場所の轉換をなすことによつて、相互の運動を可能ならしめられるやうな存在論的原理として把握されてゐたからである。

註(1)　Tim. 48 E-52 D.

(2)　Bergson, Quid Aristoteles de loco senserit, p. 61f. 熊野氏譯、哲學研究二百七十八號九十二頁、

(3)　Phys. Δ 4. 211a 13-14; Vgl. ibid. 5,212a 31-212 b1; 212b 11-22.

(4)　Phys. Δ 5. 212b4-6.　(5)　Bergson, op. cit. p. 61.

(6)　Phys. Δ 4. 212a15-16.

(7) ibid. 212a5, 6; cf. The works of Aristotle, Vol. II, p. 212a6-7, note 2.

(8) ibid. 212a28-30.

(9) ibid. 212a28.

(10) 宇宙のみが共通の場所なのではない。固有の場所と共通の場所としての宇宙との中間には、數多くの共通の場所がある。宇宙は最終の、それ故に、完全な共通の場所である(cf. Ross, Aristotle's Physics, p. 565, comm.)ベルグソンが第一の場所と共通の場所の中間に、特有の場所(locus proprius)を認めて居るのは、アリストテレスの見解でないと思はれる。(Bergson, op. cit. p. 62)

(11) Phys. Δ 5, 205a31-205b1.

(12) ibid. 5, 212a8-22.

一二

扨て、以上述べ來つた、アリストテレスの自然的個物並にこれを自然的世界環境に於てかやうなものとして限定する場所に關する論究が、彼の形而上學、即ち、一般存在論に於ける個別的實有に關する存在論的主張の基礎に横はると想定することは、單なる臆斷に過ぎないであらうか。我々は今、彼の自然學と形而上學との一般的な聯關を根本的に明にする必要を見ないが、以上の想定を確かめる程度に於て、兩者の關係を追求して見度い。

アリストテレスの自然學全八卷は、他の自然に關する個別的論究と異り、個々の自然現象を直接研究の對象として居るものではない。自然を一般的に論究して居るものであり、その限りに於て、主として、自然存在論の基礎理論を展開して居るものと見るのが至當であらう。こゝでは、自然そのものの存在論的意味、その構成的原理、運動一般の存在論的性格、及びそれを一般に可能たらしめる存在論的原理等が詳細に論究されて居る。所で、運動には、云ふ迄もなく、運動の主體がなければならない。それが即ち運動體たる自然的個物である。只この自然學に於ける運動體は、運動する個體(κινούν)であつて、存在の主體として取扱はれては居ない。所が形而上學に於ける個體は、ウシアとし

て、現實的・個別的實體として、その主體的存在性格が問題とされ、且つ明確に規定されて居る。即ち、アリストテレスが、「自然學には、事物が、それが存在者としてゞなく、それが運動を分享する限りに於て、その研究が指定せられる」[1]と云ひ、或は「自然學は、存在する事物が、存在するものとしてゞはなく、運動するもの（κινούμενα）として、その屬性及原理を論究するのであるが、第一義的知識たる哲學は、既に述べたやうに、只その基體が、存在者たる限りに於て論究するもので、その他の如何なる性格に於てゞもない」[2]と述べて居ることがこれを證明する。[3]

扨て、然らば、感性的な事物が、運動の主體として扱はれる場合と、存在の主體として取扱はれる場合と如何に異るのであらうか。運動の主體として自然學の對象となる場合には、それは自然的な存在（φύσει ὄντος）[4]である。所で自然的な存在とは、自然學第二卷の說く所に從へば、自己の中に運動及靜止の原理（ἀρχὴ κινήσεως καὶ στάσεως）[5]を持つもので、例へば、動物及びその部分、植物及び單純體（τὰ ἁπλᾶ τῶν σωμάτων）[6]即ち地水火風等である。これ等は運動の原理を自己自身に於てゞはなく、自己以外に持つところの人工的制作品たる寢臺や衣服と對照せしめられてゐる。更に運動と云つても、自然學では、主として場所運動乃至それに歸著せしめられる增大縮少、性質變化等の運動が擧揚され、此種運動の原理を自己に持つものが即ち、自然的存在なのである。所が、同じ感性的な事物も、存在の主體として見ることも可能であつて、此觀點からすれば、感性的な存在も、その存在論的な性格が問題となる。勿論、此場合には、感性的な事物は、直に自然的な存在を意味するのでない。アリストテレスが明な對照に於て語つて居る人工的制作品も、感性的存在たるを妨げないのであるから、その存在論的な性格は、自然的な存在と同樣に問題とすることが出來る譯である。アリストテレスは、自然的な存在に對して、人工的制作品は、制作の原理を自己自身に於てゞはなく、制作者の中に持つと云ふことを以て、存在論的性格を特徵づけてゐる。[7]即ち、彼によれば、一般に生成に於ては、凡べて何ものかによつて（ὑπό τινος）、また何ものかから（ἐκ τινος）生成し、何ものかへと生成するのである。所で、自然的生成物にあつては、質料因（ὑπὸ οὗ）動力因（ὑφ' οὗ）、形相因（κατ' ὅ）の三者共に自然であ

る、人が人から生成してくる場合のやうに。ところが技術的なポイエシスでは、生成して来るものは、その形相的本質を、技術者の精神内に持つて居るのであつて、質料因以外のものは、生成するものに於てではなく、制作者の中に存する。制作的な運動は、質料なきもの、卽ち、制作者の精神内の形相が、制作者の制作的行爲を通して、質料をもつものの上に實現せられゆく過程である。所で、運動は、極めて廣汎な意義では、自然學第三卷第一章に說かれるやうに、[9] 自然的生滅は固より、その例示するところから察し得るやうに、制作的活動（例へば οἰκοδόμησις）をも含むところのもので、從つて變化と同一の意義に解され得るが、自然學で本來取扱つて居る運動は、狹義のものであり、從つて生滅變化を含まず、藝術的制作活動は固より、一般に、主體的な人間存在の行爲を含まない。從つて、自然學で限りの感性的存在と云へば、右の狹義の運動の主體であり、制作活動の主體、道德的行爲の主體は固より、藝術的制取扱ふ作品の如きも、嚴密には、含ましめ得ない譯である。所が、アリストテレスは、一方に於て、生成と其他の自然的運動（增大減少、質的變化、位置運動）との區別、生成運動と制作活動と實踐行爲等の存在論的構造並にその區別を明にして居るに拘らず、[10] 他方人間の眞の主體性は未だ把握するに至つて居らず、これを、自然存在との類比に於て客體的に平準化したと思はれる。卽ち形而上學に於て感性的存在を存在の主體として取扱ふと云ふことは、單にその自然的な運動を問題とするのでなく、その存在の本質並に本質的構造を問題とし、これをその存在論的な性格に於て規定しようとするものであるが、其際、人間の制作的活動並に實踐的行爲の體驗が裏面に有力に働き、存在の現實的主體的性格を規定する因子をなしては居るが、しかも、眞の主體的存在性格は、客體的・觀想的な見方の裏に隱され、從つて彼の存在論は、質料と形相との相對的聯關によつて貫通される平面的な構造を取るに至つたとするのが、妥當であらう。

かやうに、自然學と形而上學とは、密接な聯關を持つてゐる。自然學は、形而上學の理論構成の地盤となり、後者は前者の地盤から發達したものである。このことはイェーガーやロッス等も明に認めて居るところで、[11] 嘗に第一哲學

に於ける一般存在論的原理として重要な意義をもつ形相と質料の兩概念の説明のみでなく、運動一般の本質並に構造に關する存在論的解明、これと聯關しての可能態と完成態の兩概念の適用、第一動者存在の必然性の論證、場所・時間・無限等の解明等が、既に自然學に見出されるもので、これ等の概念が、後に形而上學の一般存在論の理論構成の基礎となつたことは明である。このことは、自然學的思考の傾向が、一般存在論の理論構成に一定の影響を與へたことを物語るもので、しかし、また他方に於て、形而上學が、決して短時日に完成した統一的な著作でないことを考慮に入れるならば、[11] 一般存在論としての形而上學的思索の結果が、同時に又、自然學の理論に對して何等かの形で影響したと見ることも考へ得るであらう。例へば、自然學は、運動、特に場所的運動に歸著せしめらるべき自然的運動を主として論ずるものであるに拘らず、その初めに一般運動の廣汎な存在論的解明を行ひ、其例として、歴史、人間の制作的活動乃至その他の歴史的主體的行爲が擧げられて居る如き、或は一般に運動が可能となる爲の根源として第一動者が論定されるに至つて居る思惟動機の如き、更に我々の論旨に於て最も重大な意味を持つ場所に關する論究の如き、これを示すものと考へられる。アリストテレスが、自然學に於て、空間を論ぜずして場所について論じたと云ふことは、云ふ迄もなく、場所が運動と密接な聯關を持つためではあるが、單にそれだけではない。凡ての自然的物體は場所を持つと考へられ、運動は場所の轉換であると云はれるやうに、場所は運動體と密接に結びついて居るものであり、場所は常に世界に於て運動する自然的存在體の占める場所として、またそれ等が、運動に際して、相互に轉換せられる場所として、意義あらしめられて居るのであつて、自然的世界を、かやうな運動する物體、即ち、相互に自己の占める場所の轉換をなす物體の體系として把握すると云ふことは、その根柢に、歴史的現實が、歴史的主體としての人間的存在の相互交渉の體系として把握する現實存在の體驗に裏づけられ、又逆に後者が、前者の自然存在論的論究の結果に影響せられることを示すと云ひ得るのではなからうか。兎に角、場所は、自然的存在を、自然的世界に於て、そのやうなものとして可能ならしめる自然存在論的原理であると共に、それが一般存在論の基礎構造に對し重大な意義

を有することを理解しなければならぬ。然らば、場所が、一般存在論に於て持つ重大な意義とは何であらうか。我々は、この事を明にする前に、場所と相並んで、自然的存在を運動體として可能ならしめる他の一つの重要な原理である時間について考察を行ひ、それが、アリストテレスに於て、場所と同様、運動及び運動體を離れては考へ得られないものであること、從つて、場所的空間と共に、それらが可能なるための自然存在論的原理であること、しかも、自然學に於ての時間が、かやうに運動體と密接に聯關し、運動體を自然的世界に於てかやうなものとして可能ならしめる原理であると云ふ點に於て、それが一般存在論の理論的地盤となり得ることは、全く場所の場合と同様であることを明にして置きたいと思ふ。

註(1) Met. K 3. 1061b6-7. (2) ibid. 4. 1061b28-32.

(3) こゝでアリストテレスが、存在者としての存在と、運動するものとしての存在とを對立せしめて居るのであるが、此對立を、かの神學篇に於ける對立、即ち、超感性的な不變不動の實體と、感性的な變化と運動に從屬する實體との對立を意味せしめて居ると見ることは困難である。何故なら、こゝでは、超感性的な實體と感性的な實體との區別が問題となつて居るのでなく、存在の一般とその部分とが問題となり、凡そ存在と云はるゝものの全部が、哲學の研究領域に屬すること、そして存在するものは、凡べて一つの共通の性格を持つこと、之に反して、自然學は、存在が運動するものとしてある限りに於て研究することが主張されて居るからである。このことは反面に於て、自然學の對象たる事物も、存在としては第一哲學の論究範圍に屬することを許容して居ると見られる。尚このことは、形而上學第七卷に於ける言明、即ち「感性的な實有に關する論究は、或意味では(πως)自然學即ち第二哲學に屬する仕事である」と述べられて居ることによつて、半面から證示されて居ると思はれる。即ち、こゝでは、事物を一般に運動の主體として見る場合と、一般に存在の主體として見る場合との區別を明にしたものと見たい。

(4) Phys. A 7. 190b18. (5) ibid. B 1. 192b14. (6) ibid. 192b10.

(7) Met. Z 7. 1032a29-1032b1; ibid. 1032b22-23.

(8) Phys. Γ 1, 201a10-19.
(9) E. N. Z 4. 1140a1-23, Vgl. Schwegler, Die Met. d. Arist. Bd. 4. S. 7.
(10) Jaeger, op. cit. S. 178, 311 f.　(11) ibid. S. 200.

一三

扨て、アリストテレスの空間に關する論議では、第一の固有の場所が論究の中心を占めてゐる。彼の所謂共通の場所とは、云はゞ全體空間を意味すると見られるが、單なる無限延長としての空間ではない。運動體系としての自然的世界とその限界を等しくし、そこに於て、すべての自然的運動體が、それを共通の場所として、相互に自己に固有な場所の轉換を行ふのである。然るに固有の場所は、それぞれの自然的運動體をかやうなものとして可能にする原理として、運動體を、包むところのものから限界づける原理である。このものは、云はゞ包まれるものと包むものとの限界そのものとして、物體をその於てある世界から區別すると共に結合するもの、しかも、全體の場所的空間は、かやうな限界的表面の、云はゞ積分として、矢張り一つの延長量として表象せられてゐる。

恰も、「全體の場所的空間」に對する「固有の場所」の占める位置を、「全體の時間」に對して占めるものは、「今」である。空間に對するアポリアが、第一の固有の場所に集中するやうに、時間に關するアポリアは、「今」を中心として回轉する。卽ち時間に關するアポリアは、時間の存在及本質に關するものであるが、結局、それは「今」に關するアポリアとなる。何故なら、時間は、過去・現在・未來を含むと考へられるが、過去は既に過ぎ去つて存在せず、未來は未だ來らないもの故存在しないとすれば、結局「今」のみが殘される譯であるが、その「今」が、實に不可測のものであるからである。時間を分割し得る全體と考へるならば、全體はかやうな分ち得る部分から出來て居り、部分は全體の尺度となるのであるが、「今」はかやうな部分とは考へ得ない。「今」は存在するが如く、存在しないが如

く、時間は決して、かやうな部分としての「今」の集積した全體とは考へ得ない。こゝに時間に對する深刻なアポリアが纏ひつく。卽ち、もし「今」も存在しないと云ふことになれば、時間を構成して居ると思はれるどの因子を取つて見ても、明確にその存在性格を限定し得ないこととなり、從つて「非存在から出來たものは、ウシアを分享することはあり得ないことと考へられる」[1]と云はざるを得ないであらう。しかし、この時間の存在に關するアポリアも、その存在論的本質及び性格に關するアポリアも、決局は、「今」に關するアポリアの解決によつて、終局の解決を見出すであらう。何故なら、「時間なければ「今」はなく、「今」なければ時間がない」[2]と云はれる程、「今」と時間は密接な聯關を持ち、時間は、部分としての「今」の集積的全體ではないが、しかも、「今」は或意味に於て時間を計量し、時間を構成するものであるからである。

然らば、「今」とは何であらうか。又その「今」によつて構成される時間とは何であらうか。アリストテレスに於ては、場所及び空間が運動體及びその運動と密接な聯關を持つて居たやうに、「今」及び時間は、更に深くこれ等のものと聯關するのであつて、時間は常に運動と共に認められ、少くとも、運動に屬する或ものと云はれる。[3]

扨て、「今」に關するアポリアは、それが存在するが如く、しないが如く不可捉底の所にある。それは過去でもなく未來でもなく、しかも過去と未來を結合し、運動に伴つて時間の經過があり、時間の經過に伴つて「今」の推移があるが、「今」は常に同一の「今」として止まるか、はた、常に異つた「今」として推移するのであるか。常に異つたものとすれば「今」が時間の部分でない以上、その異つた「今」は同時的であることは出來ない。「今」は必ず自己の存在を、自己自身に於てか他の「今」に於てか、これを讓つて、自らは消滅しなければならぬ。しかし、自己に於て存在を讓ると云ふことは、存在を續けることに外ならない。しかし、「今」と「今」とが、部分と部分、點と點のやうに相並び得ないとすれば、前なる「今」が、之に並んだ次なる「今」に、自己の存在を讓つて、その存在を止めると云ふこともあり得ない。さりとて「今」は常に同一ではあり得ない。それでは時間の經過はあり得ない

し、時間が分割的と考へ得る以上、有限の時間を限定する「今」は、常に同一ではあり得ないからである。

所で、アリストテレスが、此「今」に纏ひつくアポリアの解決に於て示した方法は、全く場所の場合と同様である。即ち、こゝでも、限界(πέρας)の概念が有力に働く。恰も場所が、包むものと包まれるものとの限界を意味したやうに、「今」は、過去と未來とを結合する時間の限界と考へられる。「今」は、過去の終末と未來の發端を限界づけるものとして、本來過去にも屬せず、又未來にも屬しない。却つてそれ等を限界づけるものである。即ち「今」は或意味で同一不動でなければならぬ、恰も場所がそうであつたやうに。しかし「今」が絶對に同一不動であるなら、時間が成立たない。時間は或意味に於て、異つた「今」の推移である。このアポリアは如何にして解決されるであらうか。「今」は、過去と未來を分つ限界であると我々は云つた。その限り「今」は過去の終末であると同時に未來の發端であるかやうに「今」は過去と未來とを分つ限り、「今」は常に異つて居ると考へられるが、同時に「今」は兩者を結合するものであり、その限り、「今」は常に同一であると云はれる。[5] 即ち、「今」は、或意味に於ては常に異り、他の意味に於ては常に同一である、と云ひ得ることによつて以上のアポリアが解決されるのである。しかし、このことは眞實には何を意味するであらうか。恰も、數學上の直線が、任意の點によつて二つの部分に分たれ、しかも亦その點によつて結合されて居ると同様に考へるべきであらうか。[6] 確かにアリストテレスは、かやうな直線との類比に於て考へたことは事實であり、「今」は恰も可能的に直線を分つ點の如きもので、線を分つ部分の相違によつて點はそれぞれ異ると考へられるが、それが一つの點として二つの線分を結合すると云ふ限りに於ては同一であるとも考へられる。しかし、かやうな類比こそ、アリストテレスの時間論の特徴であると共に弱點である。此のことは更に後に述べるであらう。

扨て、アリストテレスが、時間を「前・後に從つての運動の數」と定義したことは周知のことであるが、此定義に現はれる「前」「後」なる概念が問題である。時間は運動でないが、運動の或ものと云はれ、運動に即してのみ時間の本質は明にされるのであるが、若し我々が「前」「後」の關係によつて運動を限定するのでなければ、時間の經過を

認めることは出來ない。卽ち時間が運動の數と云はれ得るのは、運動が、「前」「後」によつて數へられ得るからである。所で「前」「後」とは何であらうか。「前」「後」の區別は、場所の相對的位置から來るもので、場所運動をする自然的運動體の運動に於て占める位置が、「前」「後」の區別の基礎である。卽ち、運動體が、或時はAに在り他の時はBに在るとすれば、我々は、AとBを異つた「今」として前後の區別をつけ、時間の經過を認識するのである。これによつて我々は、時間及び「今」の本質並にそれに纏ひつくアポリアは、自然的運動體と聯關せしめることによつて解決し得ると云はねばならぬ。何故なら「今」は或意味で同一と云はれ、他の意味で異なると云はれるのは、アリストテレスの術語的表現を用ふれば、「今」は基體的存在（τὸ ποτὲ ὄν）としては同一であり、ロゴスに於ては、或はτὸ εἶναι に於ては異なることを意味する。卽ち、「今」及び時間が運動體に對應することは、恰も場所及び空間が運動體に對應するが如きものであつて、運動體は、石であれ、その他如何なるものであれ、それが同一の運動體である限り常に同一の場所をしめる、卽ち「限界づけられたものに於ける限界」としての場所は、常に同一に止まるのであるが、それが、或時は此處にあり、他の時は彼處にある限りに於ては、互に相異る場所をしめる、卽ち場所の轉換推移があると考へられるやうに、「今」は、一つの運動體の現在の一つの時間點を示し、過去と未來の限界をなすと云ふ點に於ては、常に同一に止まるが、運動體の場所の轉換推移に伴つて、常に一定の異つた時間點を示し、一定の過去と一定の未來とを限界づけ、「前」或は「後」の性格を帶びることによつて、相互に異ると考へられるのである。

かやうにして、時間の存在並に本質に關するアポリアは、「今」のそれに關するアポリアに集中し、後者は結局、運動體との密接な聯關を顧慮することによつて解決せられた。このことは何を物語るものであらうか。これは結局、「今」が場所と同樣に、運動體の自然的世界に於ける運動並にその存在を、かやうなものとして可能ならしめる原理——自然存在論的原理であることを示すものではあるまいか。我々は前に、場所は、自然的運動體を自然的世界に於

て先づ固有の場所に於て限定し、次で、共通の場所に於てその運動を可能ならしめることを明にした。然るに、運動體が自然界に於て運動し自己自身の存在を可能ならしめるには、それが、一定の場所に於て、一定の時間點卽ち一定の「今」に於て限定されなければならぬ。或運動體が世界內に在ると云ふことは、一定の時に、一定の場所を占めて居ると云ふことである。所で運動は場所の轉換によつて行はれるやうに、同時にそれは又「今」の推移によつて可能である。運動が、同一の場所の移動でないやうに、時間は、同一の「今」の推移でない。場所がAからBに轉ずるやうに、「今」は「前」から「後」へと推移するのである。しかし、場所が「包むものと包まれるものとの限界」と云ふ意味に於て常に同一の意義を保持するやうに、「今」は、過去と未來とを限界づけると云ふ意義に於て同一を保持する。かやうに二者共に一面同一を保持すると共に他面異ると云ふことは、それ等が自然的運動體そのものの世界內に於ける運動を可能ならしめる原理であるがためである。

所で、我々に取つて興味の深いことは、「今」は場所と同樣に限界と考へられ、過去と未來とを截然分つものと考へられて居ると同時に、それが、數學的直線との類推に於て、直線を二部分に分つ一つの點の如く、二者を連續的に結合すると考へられて居る點である。「今」は決して存在論的には、數學的な點の如きものではない。それは、過去と未來とを本質的に限定するものであり、之を或意味で對立せしめると同時に結合するものでなければならぬ。このことは歷史的現實に於ける行爲的主體の論理に於ては、最も明瞭に認められることである。アリストテレスが、一般存在論に於て、個體存在の一般存在論的原理の把握に於て、時間の辨證法的性格を充分把握し得なかつた理由は、此自然存在論的思考が、一般存在論の地盤を提供したが爲であつたと見做さざるを得ない。

之を要するに、「今」は自然的運動體の限定の原理として過去と未來を限界する限り、それが一定の時間點に於てその運動體をそのやうなものとして限定すると共に、過去と未來をそれぞれ自己と異るものとして限定する意味を持つのであるが、そしてその限り、數學的點のやうに相並んで存在するとは考へられないのであるが、同時に、一直線

を二つの部分に分つ點的存在との類推に於て考へられ、從つて時間は、かやうな點としての「今」の連續的推移によつて成立つ量的存在として把握せられる一面を備へてゐたと思はれる。[7]

（未完）

註(1) Phys. Δ 10. 218a2-3.　(2) ibid. 218a31-218b20.
(3) ibid. 11, 219b33 220b1.　(4) ibid. 11, 219a8-10.
(5) ibid. 13. 222a14-15.　(6) ibid. 222a14-17.
(7) Cf. Ross, Aristotle's Physics. p. 600.

前號目次

歴史哲學の問題……文學士　大西友太
危機神學の生成とその展開（承前）……文學士　樋元和一
—近世前期フランス精神史論—
オーストラリアのトーテミズム（完）……文學士　堀幸男